



上・小谷内さんの庭にある湧水。山からぼたぼたと落ちる水滴が直径1m、深さ1mほどのくぼみにたまっている(2/9 撮影・石川県珠洲市正院町平床)



下・湧水を使った流し台。避難所のそばに設置された(2/11 撮影・石川県珠洲市馬線町)

# 被災者を支える「湧水」保全を

we support!  
**RQ**  
災害教育センター

MONTHLY

「東北に黒糖を送ろう!大作戦しんぶん」改め  
復興支援「すけさきた」しんぶん

(2024年2月13日 朝日新聞デジタル)

2万戸超で断水が続く能登半島地震の被災地で、自衛隊などによる給水に加え、地域の「湧水(ゆすい)」が生活を支えている。湧水は各地で量の減少や水質の悪化が課題となっており、環境省は災害時の水源になるとして保全を呼びかけている。

## ◆湧水でやっと洗濯「本当に助かる」

半島の先端にある珠洲市では、ほぼ全域で断水が続く。市街地から車で10分ほど、正院町平床に湧水を提供する「給水所」がある。

9日に訪れた女性(43)は、併設された洗濯機を利用。「水がなく困っているの、本当に助かる」とほっとした表情を浮かべた。給水を使ったコインランドリーがどこもいっばいで洗濯ができていたという。

朝夕には、ポリタンクや洗濯物を持った人がたくさん訪れる。ベンチや伝言板も置かれ、地域のコミュニケーションの場にもなっている。

## ◆裏山から流れ出す水、「もしかしたら」

湧水や洗濯機を提供しているのは、この家に住む小谷内(こやち)毅さん(63)。裏山から流れ出す水が深さ1メートルほどのくぼみにたまっており、ホースでつないで誰でも利用できるようにしている。

地震の前、湧水のくぼみには泥がたまっていたが、「もしかしたら」と掃除をしたところ、澄んだ水がくめたという。

「山の浄化能力はすごいなと改めて思った。昔は近所にもっと水源があったが、埋めてしまったところもある。湧水をどう残すか、考える必要があるのでは」と話す。

## ◆「やっぱり水」湧水を見直して

地震の後、集落に通じる道が寸断され、孤立状態になった半島北端の同市馬線町(まぢまぢまち)。避難所には、こんこんと水があふれる流し台が置かれていた。

300メートルほど離れた住宅の庭から湧

「すけさきた」とは宮城県登米市あたりの言葉で「ポランティアに来たよ」という意味である。

JUNE 11 2024



水をひいているという。水の備蓄はほとんどなく、洗う物に使っているほか、風呂や煮炊きに利用された。町内の自宅で生活を続ける田中栄俊さん(76)は数日おきに、湧水をタンクに入れて持ち帰る。

「家は大丈夫だったが、やっぱり水がないと生活できない」水道復旧が見通せない中、自宅近くの湧水を新たな水源として活用できないか試みているという。

## ◆環境相「湧水の重要性を再認識」

丘陵地が続く能登半島では、各地に湧水がある。昔から生活に活用されてきたが、水道の整備とともに使う人は減っていた。伊藤信太郎・環境相は20日の閣議後会見で、「改めて湧水の重要性が再認識された。引き続き地域の湧水保全に向けた取り組みを促進したい」と述べた。

湧水は、東日本大震災や熊本地震などでも活用された。だが、都市化や土地開発で全国的に減少しており、環境省によると、2022年度の調査では全国に1万6046件。石川県は238件という。ただ、私有地内にある湧水は多く、自治体が把握できていないものも多いとみられる。

枯渇したり水質が悪化したりしている所も多く、環境省は10年、湧水の保全・復活をめざしたガイドラインを作成。災害時の水源として利用できるかと保全を呼びかける。ただ、水質がわからない場合は、飲み水や料理への利用は控えてほしいとしている。

環境省環境管理課の担当者は「湧水は健全な水循環のバロメーターにもなる。まずは把握しておくことが保全にもつながる」と話す。

## ◆「文化を支え、交流の場」

湧水に詳しい愛知学院大学の富田啓介准教授(自然地理学)は「湧水の場所や水の性質を把握しておくことは災害時に役立つ。行政機関などに頼めば、水質検査をしてくれるところもある」と話す。

富田さんは、水道の整備が進み、蛇口をひねれば水が出るようになったことで、湧水を理解し、把握する人も少なくなっていると指摘。「かつては水の湧くところに集落ができ、湧水は人々に利用されてきた。地域の生態系や文化を支え、人々の交流の場でもあった」と語る。(矢田文)